

# 「医療者は英語力の向上を」

## 医療現場では医療通訳が必要な時代に

グローバル化を背景に、日本でも近年、外国人入国者の増加が顕著だ。以前から、医療者が最新の医療情報を入力・活用するためには、英語は必須の言語だったが、外国人患者の増加で、医療現場でも医療者に英語が必要な時代になっている。だが、医師でさえ、海外で通用するレベルの医学英語を使いこなせる人は意外と少ないのが現状だ。

### 1年でTOEIC920点

こうした中、兵庫県西宮市で開業する中島敏雄医師は、30歳を過ぎたころに医学英語の必要性を痛感。満足な睡眠時間もない多忙な勤務・研究生活の中で、一念発起して独学で医学英語の習得を目指した。

勉強を初めてわずか1年たらずで、TOEICで920点を取得。現在も勉強を続けながら、英語を母国語とする外国人患者に英語で診療しているほか、日本パブリックサービス通訳翻訳学会などで医療通訳に関する普及啓発活動にも積極的にかかわっている。

中島氏自身、もともと英語が堪能だったわけではない。

幸か不幸か、先進国の日本では、医学部教育では教科書も講義も日本語で事足りる。医学部でも、英語の講義は大学教養課程1、2年で終わり。医学の専

門知識習得に忙しくなると、英語だけを勉強する時間もない。

医学生になるのにそれほど英語の必要性は感じなかったという。

ところが、いざ医師になってみると、最新の医学情報を入手しようと思ったら、やはり英語が必須であることに気付く。「医師なら誰もが感じることでないでしょうか」と中島氏は話す。

### 英語で診療できるレベルに到達

30歳過ぎのころ、病院勤務と大学での研究を続けていた中島氏は、普通の会社員の勤務時間に換算すると、月120時間以上の残業に相当するほどの忙しさだった。

しかし、そこで明確な目標を定め、最終的には英語で講演できるレベルにまで英語を究めようと思ったところが、中島氏のすごいところだ。

その経緯は著書「Dr.中島のTOEICテストスコアアップ革命」

に詳しいが、勉強の進捗度の目安に受けたTOEICの点数は、初回710点から、1年あまりで920点にスコアアップした。

その後、英語論文を読んだり、書いたりすることも苦ではなくなった。英語での研究発表も実践し、段階的に自身の目標をすべて達成していった。

キリスト教系の学校の多いクリニック周辺には、外国人の教師など多いことから、「英語でも診療してくれる」というお話を聞きつけて、来院する外国人が少なくないという。

「中には日本語が流暢な方もおられますが、やはり母国語の英語で話した方が、患者さんの安心感が高いようです」と中島氏。

クリニックの受付には英会話集や英文問診票を備え付け、スタッフもある程度、英語に対応できる態勢を整えている。

臨床に携わる中で、中島氏がいま痛感しているのは、医療通訳の必要



中島氏

性だ。関西では、関西国際空港に近い市立泉佐野病院の国際外来で医療通訳が活躍しているが、人材不足や制度的な裏付けがないこともあって、こうした試みは全国的にまだごくわずかだ。

日本パブリックサービス通訳翻訳学会などで医療通訳の普及啓発活動にもかかわるようになって、中島氏は医療通訳の研修制度と認知度の向上が必要だと感じているという。

医師としての中島氏の基本コンセプトは「みんなが安心して医療を受けられるように」(Open doors of opportunity for everyone)。

グローバル化が進む中、そうした医療を実現するためには、医療者の英語力向上や医療通訳が不可欠な時代になっているようだ。



講演活動で医学英語の普及・啓発にも一役